夕焼け通信 1342号　2022.2.21
〒690-0823　島根県松江市西川津町4276-B402　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/　編集 宮森健次

専業ババ奮闘記（その２） 88

木幡智恵美

職場復帰準備（1）

ショートステイへは、週二回の風呂の日に、夫と交代で汚れ物を取りに行き、着替えと紙オムツやパッドなどを預けるだけになった。面会が出来ないので、受付で様子を聞く。「家に連れて帰るよう伝えてとのことです」と言われると、義母のことが始終頭から離れなくなり、「お変わりありません」と言われると帰りの足取りが軽くなった。

そうこうしているうちに、娘の職場復帰が近づいてきた。そのためには、二つのことをクリアしなければならない。一つは宗矢の手術、もう一つは託児所へのお試し入所だ。

宗矢の泣き入りけいれんを診てもらっている病院で、主治医に指摘されたのが生殖器のちょっとした異常だった。成長した際、うまく機能しなくなるといけないので、一歳になる前に手術をするとのこと。手術が行われる病院でクラスターが発生し、どうなるか心配したが、十二月下旬に手術は無事終わり、その後も順調のようだ。我が長男が鼠経ヘルニアで、大泣きすると陰嚢部に腸がはみ出るという症状が出、宗矢と同じように一歳になる前に手術をしている。手術室からベッドに貼り付けられた状態で出てきた姿を見た瞬間、涙があふれた。術後は傷の治りが悪く、整形外科に連れて行くなど、あれこれ心配した。医療技術の進歩もあり、宗矢の場合、どこを手術したか分からないほど綺麗になっていた。

もう一つは託児所のこと。年内に面談をし、泣き入りけいれんの話をすると、同じような子どもを受け入れたことがあり、預かってくれるとのことだった。年が明けると、宗矢の託児所慣らしを何回かするとのこと。初回は十二日、九時から十一時までの二時間ほど。その日、娘が宗矢を迎えた帰りに我が家に来た。聞くと、宗矢はずっと泣いていて、迎えに行った時には泣き疲れて保育士に抱かれて眠っていたそうだ。昼時だったので、私たち夫婦と娘、宗矢四人、残り物で昼食を摂る。孫たちは、どの子も歩き出すのが遅く、一歳三～四箇月でやっと歩き出している。あと二日で一歳になる宗矢も同様で、まだ這い這いだ。食事を終えると、緊張が解れたのか、台所を這い回っていた。

夕方、義母のところに着替えなどを持って行く。受付の方が、「お変わりないです」と言われ、汚れ物を手渡された。そして、「面会禁止が長引きそうです」と付け加えられた。

がらがら橋日記

宮森健次

土手を歩く

実家は、相続してぼくの所有となったのだが、今の暮らしを今すぐ変える必要もなく、とりあえず問題先送りでしのいでいる。

今の住まいを変えがたい理由の一つが、アパートのすぐ前を流れる朝酌川だ。川面の映し出す光や風景を見ながら土手を歩く時間、それはことさらな散歩だけでなく、スーパーや郵便を投函する行き帰りなのだけど、仕事をやめてから、何だかそれがとても愛おしくなってきた。所有している土地じゃないというだけで、一歩アパートを出れば広がっているのだから自分ちの庭みたいなもんだ。ものは考えようで、ずいぶんぜいたくな暮らしをしている。

夜からの雪がうっすら積もった日、スーパーで特売の野菜を買いに行った帰り、いつもの通り庭を歩いていると、二羽の白鳥がいるのに気づいた。ここに来て五年、白鳥を目にするのは初めてである。この辺りに棲息しているのは、カイツブリやオオバンが主で大きくてゴイサギなので、それの二倍とも三倍ともつかぬ巨軀で悠々と泳ぐ様は、場を圧していかにも真打ち登場といった雰囲気だ。ぼくは、すっかり見とれてしまい、ネギの頭を出したリュックを背負ったまま、その後を追って元来た道を戻ることにした。

つがいとおぼしき二羽は、交互に首を水中に差し入れては川上へと泳いでいく。何かとせわしないオオバンたちとは違い、所作の一つ一つが何とも優雅に見える。この川で白鳥を目にするなど思ってもみなかったので、二羽はもとより先住のやかましい連中がどのような挙に出るかわからず、目を離すまいとついて行った。途中信号に阻まれたときは見失うのではと気をもんだが、白鳥たちは悠然と遡上を続けている。それがぼくの歩く速さとまったく同じなので、これは端から見ると、いっしょに散歩しているように見えるはずだ。「どうしてそんなことができるんですか！」と誰か通りがかった人が驚嘆してくれるのではないかと期待したが、この得がたい光景を共有する歩行者は此岸にも彼岸にも誰一人いなかった。雪が降る平日の午前中に白鳥の追っかけに興ずる者などおるはずもないか。仕事や用事に行き交う車は、ひっきりなしに通るが、土手を歩かねば川面を見ることはできない。すぐ側を擦れ違っておりながら誰もこれを見ないとは何とも残念だ。

がらがら橋の近くでぼくは足を止め、二羽の後ろ姿を見送った。白鳥が現れてくれたようでいて、実はぼくの方が歩くことで生き物たちのリズムに同期できたのかもしれないと思った。そういえば、ちょっと前にはヌートリアと散歩したのだった。

30代フリーター　やあ、ジイさん。ロシアがウクライナの国境付近に兵力を集めているのをとらえて、ウクライナに攻め入るのではないか、とアメリカなどが懸念を表明している。

年金生活者　先日こんなツイートに出くわした。「今にもロシアが侵攻すると騒ぐ米国に対し、欧州やウクライナはこれをハッタリと見る」。私はこの見方に同調する。

ロシアとウクライナをめぐる情勢について確かな情報を持たない私が、唯一持ち合わせている判断の物差しは、世界の戦争の本流は、破壊と流血をともなう熱い戦争、リアルな戦争から、抑止力・威嚇力を競い合う冷たい戦争、バーチャルな戦争に移ったという認識だけだ。それに従えば、ロシアがウクライナに熱い戦争を仕掛ける可能性は低い。

30代　ロシアには隠密裏に軍を出してクリミアを奪った前科がある。

年金　クリミアに熱い戦争を仕掛けたわけではない。軍を威嚇力として使う冷たい戦争によってこの半島をわがものにした。

さっきふれたツイートは、朝日新聞記者の国末憲人がイワン・クラステフという政治学者の見方として紹介したものだ。国末は関連のツイートで「米国は、ロシアが大規模侵攻すると考えがちだが、欧州やウクライナはむしろ、ハイブリッド攻撃を想定する。国境に兵力を集めつつ、エネルギー配給を武器として利用し、サイバー攻撃をしかける手法だ」というクラステフの見方も紹介している。つまり仕掛けるとしたら熱い戦争ではなく、冷たい戦争だという指摘だ。

30代　バイデン政権は、ロシアがウクライナに侵攻すれば大がかりな経済制裁を科すと強調している。

年金　武力で撃退すると言わないのは、タリバンにも勝てないほど自国の戦争遂行能力が著しく低下していること、他方で経済制裁の持つ打撃力が以前より増していることを知っているからだ。

経済制裁の打撃力の向上は、世界経済のグローバル化によって進んだ。世界がマネーによって緊密につながった結果、経済が攻撃の対象にも手段にもなることが常態化した。現在の米中対立が、互いの経済への攻撃として繰り広げられ、各国が「経済安全保障」を追求するようになったのはそのためだ。

これは同じ冷たい戦争でも東西冷戦では見られなかった現象だ。現在の冷たい戦争には、核という使えない兵器のほかに、経済力という使える兵器が新たに加わった。

デイビッド・スティルウェルという前米国務次官補（東アジア・太平洋担当）が朝日新聞のインタビューで、中国の基本戦略は「戦わずして勝つこと」にあるとして、台湾への即時侵攻の可能性を否定し、経済的な打撃による士気の低下を狙っていると指摘している（2月9日朝刊）。経済を打撃力として使う戦争、言ってみればそれほど熱くないけれど、冷たくもない経済戦のウェートが増していることを示している。

スティルウェルは中国の狙いを「台湾の経済に打撃を与えて、台湾側が平和的手段を求め、中国と対立する気力をくじくことにある」と分析している、と記事は伝えている。それだけ中国が自らの経済力に自信を持っていることを物語っている。

30代　ロシアには中国ほどの経済力はない。

年金　だから、ロシアがウクライナに対して行使している一番の力は経済力ではなく、軍事力だ。ただし、それは破壊力としてではなく、威嚇力として使っている。熱い戦争の費用対効果の悪さを考えれば、当然の選択だ。国境付近に部隊を展開しているのは冷たい戦争の一環であり、それは相手方の目に今にも侵攻しそうに映らないと効果は半減する。つまり侵攻が差し迫っているように見えれば見えるほど、その可能性が低いという一面がある。

30代　ここに来てプーチンが「交渉」を強調しだし、軟化の姿勢を見せているのに対し、バイデンは「侵攻の可能性はまだ十分にある」と、警戒を解いていない。

年金　ロシアが冷たい戦争に必要な威嚇力を維持するためのパフォーマンスとして小規模な戦闘を仕掛ける可能性は想定し得る。

いまロシアがウクライナの国境付近に軍を集結させているのは、熱い戦争によってウクライナを占領するためではなく、冷たい戦争によって米欧の譲歩を引き出すためだ。ただ、ロシアが軍隊を集めただけで、それ以上のことをしないでいると、侵攻する気がないと判断され、威嚇力が低下する恐れがある。

だから、にらみ合いが長引きそうだと、ロシアはただの脅しでないことを示そうと小規模な戦闘を仕掛ける可能性はある。ただし、それはあくまでも抑止力・威嚇力を維持するためのものであり、冷たい戦争の効力を保つための手段として行われるだろう。敵の軍事力を壊滅させたり、国土を占領したりすることを主目的とした従来の熱い戦争とは異なる。

アフガニスタンやイラクを占領したアメリカは、ロシアもウクライナに同様の仕打ちをすることを可能性のひとつとして想定しているはずだ。だが、ふたつの戦争の泥沼化を目の当たりにし、ソ連時代には自らがアフガニスタンで泥沼にはまった経験を持つロシアが大規模な侵攻をする可能性は薄いと言わなければならない。

ニュース日記　820

中村　礼治

侵攻の可能性は低い